イセリア英雄戦記
the legend of the Aerea war
立ち読み版
編集 二次元ドリームマガジン編集部
挿絵 牡丹

第1話　騎士の剣、王女の意志――本文担当：神楽陽子　007
第2話　クレオラの淫謀――本文担当：高岡智空　049
第3話　砂漠の二夜――本文担当：上田ながの　103
第4話　聖槍とメイズⅦ――本文担当：天戸祐輝　149
Bonus Track　225

登場人物紹介

Characters

フィオナ＝ブリティッシュ

イセリア英雄公国の皇女。少し世間知らずなところがあるが、幼馴染みのセリーヌのことをとても大切に想っている。

セリーヌ＝アヴァリアレス

イセリア英雄公国の騎士。外交も任され、皇女からは絶大な信頼を与っている。お菓子作りが趣味という可愛らしい一面も。

リア

イセリア諜報部隊「クロウ」に所属する暗殺者。仲間の前では無邪気な姿を見せる。

イシュア

クレオラ砂漠都市の女王。物腰は柔らかく、理知的な女性だが、息子であるジュダには甘い姿を見せる。

エルス＝M（マイハ）＝アムデルト

イセリアの第三騎士団団長を務める貴族令嬢。聖なる槍《セルフェザー》と特殊能力《マイハ反応》を使う。

サラ

クレオラの王子ジュダの教育係。侍女であるにもかかわらず、ジュダへの態度が少しおかしいようだが……。

イセリア英雄戦記とは？

二次元ドリームマガジン史上初の超長期連載＆読者参加型のリレー小説！

読者の参加によって物語が展開する。

A. ○○ルート
B. △△ルート

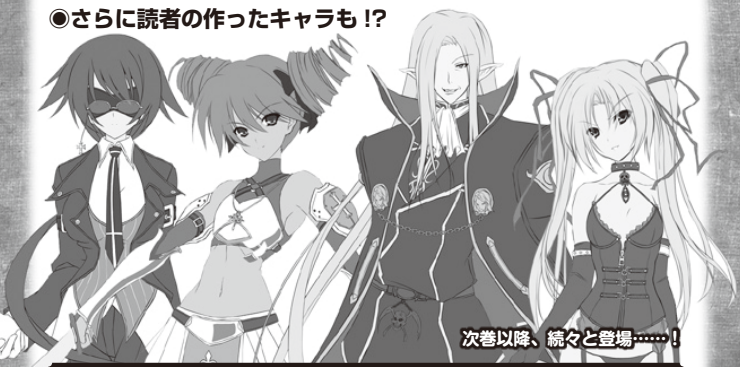
読者の投票で展開が変化！

A. ○○ルート
B. △△ルート

雑誌連載時には、本文中に選択肢が設けられています。アンケートハガキで「どちらが読みたいか」を投票していただき、より多くの支持を受けた選択肢に沿って物語が展開していきます。また、外伝小説やオリジナルキャラクターを投稿することで、読者の皆さまで『イセリア英雄戦記』を作る楽しみを味わってください。

※選択肢は雑誌掲載版のみで、単行本では選択肢は削られています。ご了承ください。

◉さらに読者の作ったキャラも！?



リレー小説形式での超長期連載

第１話 神楽陽子先生 → 第２話 高岡智空先生 → 第３話 上田ながの先生 → 第４話 天戸祐輝先生 ……

第1話は神楽陽子先生、第2話は高岡智空先生、第3話は上田ながの先生、第4話は天戸祐輝先生と、1話ごとに本文を執筆する作家が変わります。また、連載回数が20回(2012年6月現在)を超える超長期連載によって、ヒロインたちがいつ堕ちるのかが予想できなくなっています。一話ごとに雰囲気が変わる文章や、いつ堕ちるかわからない緊迫感をお楽しみください。

※第３話からはセリーヌとフィオナのそれぞれの視点で物語が進み、第３話および第４話の直接の続きは、２巻収録の第５話および第６話となります。

公式サイトでさらに楽しく！

読者による投稿小説や投稿キャラクターが公開されている公式サイトでさらに『イセリア英雄戦記』を楽しめます。登場キャラクターのスリーサイズや国の設定などもまとめられており、現在行っている人気キャラクター投票などのWebコンテンツも今後、他のコンテンツを追加予定です。

『イセリア英雄戦記』公式サイト　http://ktcom.jp/icerya/

（あれが、殿方の……っっ⁉　い、いやぁっっ……そんなもの、見せないでっっ！）

だが顔や視線を背けたり、瞳を閉じたりすると、首にかかったサラの手がグッと押し迫ってくる。それがパニックを煽るせいで、今何をどうするべきか、冷静な判断も許されず、フィオナはこの狂った状況を両の目で見届けさせられてしまう。

「あっはぁぁぁ……見た目通り、初心な王女様ぁ……くすっ♥　で、もぉ……あふっ、んふぅぅっ……貴女もじきに、ご理解できるかと思いますわぁ……理性が蕩けるほどの、セックスの気持ちよさを……あひっ、いっ……んはっ、ふあぁぁぁ……っっ♥」

痙攣するかのように脚を震わせ、何とか腰を下ろすと、どうしてあれだけのものが入るのかと思うほど極太の肉塊が、女王の胎内に埋まってゆく。プチュッ、ジュパンッッと愛液の塊が弾けでもしたように、牝蜜が結合部から押し飛ばされて噴き零れ、少年の腰にいやらしく降りかかっていった。と――。

「あふっ、んひっ、いひぃぃぃっっ♥　んぁっ、らめっ、らめれふぅぅっ……あっ、しゅみ、ま、ひぇっっ……んごっ、ごしゅじんっ、様ぁぁぁっっっ♥♥」

肉棒が根元に埋まるまで、ピッタリと腰を下ろしきった瞬間に、女王の背筋がピンと張り詰めて反り返り、豊乳をタプタプと躍らせながら全身が震え出す。ビクッ、ビククンッと切なそうに痙攣し、ようやくこちらを向いた女王の顔は、もはや焦点も定まらないアヘ顔になって、瞳が蕩けきっていた。

（あぁっ、う、そっ……あ、あんな、すごいものを……挿れられて、どうして……どうし

てそんな、陶酔した、表情を……）

本当に、悪夢のような光景だった。女性の大切な部分が嫌というほど押し開かれ、血管の浮き出した凶器のような肉塊に蹂躙されながらも、女王はふしだら極まりない喘ぎを押さえようともしない。それでいて表情は、己の望みがすべて成就したかのような、満たされきった笑みを浮かべている――女性としての恥を晒してなお、そんな顔を見せている彼女のことが、恐ろしくてたまらなかった。

「やれやれ、セックスの紹介もできないでイッちゃうなんてね……ほんと、だらしのない女王様だ。でも、そんなお母様も好きだからね……ふふ」

「あっっ……んっ、嬉しゅう、ごりゃいまふぅぅ……ごひゅ、り、ひゃまぁ……」

少年が微かに身を起こすと、体勢を変えるだけで膣内に擦れる肉棒の感触があまりに心地よいのか、女王はもう一度大きく身を震わせ、大きな息を吐き出した。そんな母親をまた無理矢理四つん這いにさせると、ペニスを引き抜いた王子は彼女のネックレスにロープを取りつけ、部屋の出口へと向かってゆく。

「さて、そろそろゆっくりと、部屋で愉しもうか……サラ、あとは任せるよ？」

部屋を去るジュダに、サラが答える。

「はい、お任せください、王子様……ふふ、そういうわけです、フィオナ王女……」

「――っっ、いったい、何をっ……」

不意に耳元に声を聞き、首から手が離れたことで、ようやく意識を取り戻したフィオナ

は、咄嗟に声をあげた。
「ひっ……は、離れなさいっ、無礼者！」
ギシリと寝台を軋ませ、のしかかるように近づいてくる女を、フィオナは鋭く睨みつける。そんな王女にサラは嘲笑を浴びせ、口元を覆っていた薄絹を外した。露わになった肉厚な唇を舌で舐め回し、熱い吐息をフィオナに浴びせながら、女がささやく。
「そう怯えないでください。すぐに王女もあのように……イシュア陛下のように、調教して差し上げますからね……うふふ」
「な、何を言っているのですっ……離れなさい、すぐに――っっ⁉」
――ビリィィィッッ！
一瞬、何をされたのかがわからなかった。サラの手が、軽く開いたネグリジェの胸元にかかったかと思うと、そのまま勢いよく縦に、薄い生地を引き裂いたのだ。
「やっ……きゃあぁぁぁっっっ！」
暑い気候を考え、薄手のネグリジェにしていたことが災いした。容易く引き裂かれた薄絹の奥に、就寝前でブラをしていなかった裸の乳房が曝け出される。
「あら、美しいお乳ですねぇ……ふふ」
歳若い王女に相応しく、きめ細かな白い肌は最高の張りを保っており、瑞々しい輝きを放っていた。片手では到底握れないほどに膨らんだフィオナの豊乳はタプタプと震え、薬の影響なのか少しだけ赤みを帯びている。仰向けになった体勢のせいで自重に潰れてはい

るものの、それでも釣鐘型の乳房は形よく、ツンと上向きに突き出されていた。
その薄い桃色の、小指の先端ほどのニプルがサラの眼前でヒクッと跳ねる。乳輪も小さく、乳首の僅か外を円で囲むようなサイズの薄紅が、硬くなって鎮座していた。
「い、いやっ、見ないでっ……」
羞恥に顔を赤く染め、フィオナは弱々しくささやいて顔を背ける。本当は身を抱きしめて胸を覆い隠したいのに、薬のせいで身体を動かすことがままならない。同性相手とはいえ、人の目から隠すべき乳房をじっくりと観察されることは、耐えがたい恥辱だった。
「可愛らしく震えて……ふふ、そうやって恥じ入るお姿も愛らしいこと……」
言いながらサラは乳房を包んでいた紫のブラを外して、自身の胸を晒す。フィオナやイシュアほどのサイズはないが、手のひらにほどよく納まりそうな美乳で、褐色の乳球の頂点には鮮やかな桃色が尖っていた。
「それでは……たっぷりと可愛がって差し上げますからね、フィオナ様……」
女はペロリと唇を舐め上げ、いやらしく瞳を輝かせる。そして寝台の脇に置かれていた壺からドロドロの液体を掬い取り、それをグチュグチュと手のひらへ馴染ませ、己の身体じゅうに塗り広げてゆく。
「な、何をするつもりですっ……やめなさいっ、や、やめ……やめてっ……」
女の妙な行動の先が読めず、フィオナはえも知れぬ恐怖に駆られる。動けぬ身体を枷にされた目の前で、サラは自らの首筋から乳房、そして引き締まったウエスト、細長い手足

を指先まで、全身を粘液塗れにした。
「いきますよ、ほぉら……んふふふ」
サラの手が伸び、首筋に絡みついてそのまま抱きついてくる。
「ひぅぅっ！　んくっ、何をっ……」
粘液塗れの冷たい手が触れ、フィオナは背筋を震えさせた。身を捩り、その手から逃れようとするのだがそれも叶わず、引き裂かれたネグリジェの下、晒された肌に女の濡れた肌が重ねあわされてしまう。
――グチュッ、チュブ、ニュルゥ……。
「いやっ、や……いやぁぁっ！」
ヌルヌルとした肌の感触が乳房を押し込み、首筋を撫で、グチュグチュと粘液が絡みついてくる。サラの肉体によって、自身の身体にまであの妙な液体が塗られてゆく不快さに、フィオナは眉をひそめて表情を歪め、抵抗の声を吐きもらした。
「ひぅんっ、あっ……あんっ！　は、離れてっ……気持ち、悪いっ……ん、ふぅ……」
「あら、あらぁ？　お嫌ならどうして、そんなに可愛らしい声をもらしていらっしゃるのかしら……れろぉ」
揶揄の言葉を吐きながら、サラはフィオナの首筋に顔を埋め、唾液をたっぷりと乗せた舌を伸ばし、美しい肌を舐め上げた。ザラつく舌の感触に加え、まとわりつく粘液と同じような、唾液のヌルリとした感触が肌を伝い、フィオナはゾクゾクと身震いする。なのに

身体の奥には妙な火照りが広がり、それに心を揺らされ、甘えた吐息がもれてしまう。
「あふっ……ふあぁんっ、やっ、やぁ……」
「ほぉら、また……ふふっ、可愛らしい。王女といっても所詮は女、ということなのかしら……んふっ、れろ、ちゅばぁ……」
「だ、黙りなさいっ、無礼なっ……あくぅっ、んあっ、はぁ……はふっ、うぅん……」
笑いを交えた女の蔑みに、カァッと頬を赤くして反論するフィオナ。自分でも理解できない身体の火照りに戸惑い、混乱しながらも、艶声を必死に押し殺そうとする。
（ど、どうしてしまったの……こんな、こんな声を出してしまうだなんてっ……）
「あはっ、あぁん……ふふ、王女様のいやらしいお乳が、わたくしのお乳を包み込んできます……んっ、はぁ、こんなに乳首まで硬く尖らせて……いやらしい女ですねぇ」
サラの言葉通り、フィオナの柔乳は女体に挟まれてムニュリと形をたわませ、自分の豊乳より一回りは小さいサラの乳房を押し潰して飲み込み、扱き立てるようにプルプルと震えてしまう。互いを潰しあう乳肉の間で、ふたりの硬く尖った乳首も突きあわされ、胸の奥へ突き刺さるような甘い刺激を送り込んできた。ピクンピクンと全身を跳ねさせつつ、フィオナは苦悶に身をくねらせる。
「あくっ、ふっ、あぁ……どうして、こんなぁ……はぅっ、嫌なのぉっ……」
「嘘ばっかり……気持ちいいのでしょう？　女のわたくしに身体を撫で回され、狂おしいほどに感じてしまう女なのですから」

胸への愛撫を続けたまま、舌が首筋を舐め回す。その手は背中を撫でながら身体を這い下り、ネグリジェの裾をまくり上げた。裾から覗く細く白い美脚に女の太腿が絡み、ニチャニチャと粘液の塗り込まれる音が響く。
「ほぉら……王女様のお身体、もうお薬でドロドロのグチョグチョ……ふふ、媚薬を飲まされ、しかも身体じゅうに塗り込められてしまっては、感じて仕方ないでしょう？」
「び……媚薬ですって……そのせいで、こんなっ……はふっ、んはぁ、あっ……」
そこでようやく、自身を包み込む火照りや刺激の正体が、媚薬によって誘引された女の快感なのだと気づかされる。けれど、すでに肉体の火照りはピークに達しており、鈍い疼きとなって身体に芯に食い込んでいた。そんなフィオナを見下ろしながらサラはクスリと微笑み、耳元に唇を寄せてささやく。
「うふふ、おかげで王女様の性感帯、大体わかってしまいましたよ、ほぉら……ここなんて、いかがです？」
「あひぃっ⁉　んぁっ、はっ……ひぅっ！」
サラの舌先が肩に近い首筋を擦り、指先が肩甲骨を撫で、脇腹をネットリとした手つきで捏ね回してくる。その瞬間、各所からビリビリッと痺れるような快感が迸り、フィオナはたまらず嬌声を響かせてしまう。
「ひゃぅっ、い、いやっ、これぇ……」
「触れただけでこんな反応をされるのですから……しゃぶられでもしたら、どうなってし

まうのか……気になりますねぇ？」
「――っっ！　い、いやですっ、やめてっ……あぅ、あっ、あぁぁ……」
これ以上されては、どれほど乱れてしまうか――今以上に甲高く、はしたない喘ぎを響かせてしまう恥辱的な未来を想像し、恐怖に背が震える。
拒絶の声をあげ、逃げるように首を振るフィオナだが、サラの動きは止まらない。両手でネグリジェをまくり上げ、身体は薬液を塗りつけながら下方へと滑り――ついに、晒された柔らかな腹部、その透き通るような白い肌に唇を寄せつけて、舌を伸ばした。
「はぁぁ……あむっ、んじゅっ、じゅるるっ、れろぉぉ……ちゅぶっ、ちゅぅ……」
「ひはぁぁんっっ！　んぁっ、あぁっ！」
舌先が脇腹をつついたかと思うと、そのまま肉厚な唇が勢いよく吸いついてくる。肌に口内粘膜が触れ、舌でグリグリと押し捏ねられ、激しく吸い立てられるとどうしようもなかった。目が眩むほどの刺激が肌を伝い上がって脳を貫き、フィオナは背筋を大きく跳ねさせて、甲高い嬌声を張り上げてしまう。
「んはぁぁっ！　あひっ、ひぅっ、や……いやぁぁっっ、あんっ、んぅぅっ！」
女の溢れる唾液が汗と混ざりあい、肌を吸われるのに合わせて舐め取られてゆく。その感触に快感を憶え、ゾクゾクと震えながら、フィオナは瞳を固く閉じる。そして快感を拒絶するようにイヤイヤと首を振りたくるが、サラの唇は許してなどくれない。ジュルジュルと音を立てて肉を吸い、歯先で甘く噛み締めながら、舌で丁寧に擦り上げてくる。

「んひっ、そ、そこぉ……はぅっ、いやっ、いやぁ……んっ……くふっ、ぅぅん……」
「れろぉ……んふ、塩辛いですよ、王女様？　砂漠を渡ってこられたからかしら、たっぷりと染み込んだ汗の、濃厚ないいにおいがしています……んちゅっ、ちゅるぅ……」
「ひぐぅぅっ！　いやっ、やめてっ……言わないでっ、舐めないでぇぇっ！」
湯浴みをしていないせいで肌に残っていた汗を舐められ、体臭とともに味を批評される羞恥に、顔を真っ赤に染めて拒絶の声をあげる。しかし、サラはそんな初々しい反応が嬉しくてたまらないというように笑い、顔を滑らせて腋のほうまで舌を這わせてゆく。
「じゅるっ、ちゅばぁ……ふふ、ここらへんは汗の香りが特に強いですねぇ？」
自分でも感じられるほど、たっぷりの汗で蒸れた部分を嗅がれ、顔から火が出るほどの羞恥を憶える。しかもそれだけでなく、汗を舐め取られるなど、王宮での暮らしでは考えたこともない仕打ちだ。あまりの屈辱に、たまらず泣き崩れてしまう。
「うっ、んはぁっ……こんな、ひどい……」
全身への愛撫を加えたまま、唇が腋を丁寧にしゃぶり、フィオナの喘ぎを絞り続ける。汗を舐め尽くされる恥辱に、純情な王女は涙を浮かべて打ちひしがれるが、陵辱の手は止まらない。汚れた唇をペロリと舐め、サラが淫靡な笑みを浮かべて身を起こす。
「あらあら、この程度で泣いているのですか？　本番はこれからですのに……ねぇ！」
――ガバァァッッ！
「えっ……やっ、きゃあぁぁっっ！」

（それだけは、それだけは駄目だぁっ！）
だからセリーヌは、自らジュダの肉棒に舌を絡ませ、口唇で締め上げようと――。
（駄目だっ！　それではこいつを喜ばせることになってしまう）
自分がしようとした行為が、ジュダが求めている行為だと気づいてしまう。どんな状況であっても、この少年を利することだけはしたくない。
結果ピストン速度を落とすことは叶わず、さらに激しく咽奥を突かれる結果になってしまった。
じゅずぼっ！　ぐじゅっ！　じゅぶぶっ！
「おむむむっ！　まやっ、まひゃおおふぃふなっへるっ！」
ガクガクッと玩具のように頭が揺らされる。咽奥を突けば突くほど、ジュダのペニスは大きさを増していった。破裂しそうなほどに肉先は膨れ上がり、まるで鋼のように肉茎は硬度を増す。竿全体は口腔を焼き払ってしまうのではないかというくらいに、熱くなっていた。
「そろそろだ。そろそろ射精（だ）してあげるよ。僕のザーメン。たっぷり受け取ってよね」
王子の言葉が耳に届く。
（だ、射精す？　ザーメン？　ふ、ふざけるなっ！　そのような、そのようなことっ！）
それが意味することに気づけるだけの知識は持っている。全身に震えが走るほどの嫌悪感を憶えた。

「おぶっ！　ひゃ、ひゃめろっ！　しょ、しょれだふぇはひゃめ――ぶっ！　ふぶっ！　ゆ、ゆるしゃない。ゆるしゃないぞぉっ！」

射精をしたら殺す――殺気すら言葉の中に込めるものの、少年の耳には届かない。

「ああ、その顔。たまらないな。最高だ。最高だよセリーヌ！」

自身の快楽だけに耽溺し、カクカクと猿のように腰を振ってくる。やがてこれまで以上の激しさで咽奥がジュブッと突かれ――。

「射精るっ！」

どびゅっ！　どっびゅるるるぅっ！

「んぶぇっ！　おぶぇえええっ！」

大量射精が始まった。

ビクビクッと何度も痙攣する肉竿。先端部の秘裂が左右に開き、濃厚白濁汁をセリーヌの口腔内に流し込んでくる。舌に絡み、口腔粘膜を精液が侵食してきた。

（射精てるっ！　汚い汁が。私の口の中に、ドビュドビュッて射精てるっ！　くさっ！　苦いっ！　熱い！）

嫌悪感で全身に鳥肌が立つ。それでも逃げることはできない。後頭部はがっしりとジュダの腕で拘束されてしまっており、跳ね回るペニスを咥え続けるしかなかった。

小さな口腔はすぐにザーメンでいっぱいになってしまう。行き場を失った精液は、口端から溢れ出し、口まわりを汚した。さらに鼻の穴にまで流れ込んでくる。ツーンとした痛

みが走ると同時に、鼻水のように白濁液が垂れ流れていった。とても騎士の見せる姿ではない。

（くそ……このような……このような屈辱を味わわされるとは……）

耐えがたい汚辱だった。悔しさに全身が震える。胸に痛みさえ走った。

「ははは、なかなかいい顔になったね」

が、そんな屈辱すらも、少年には喜びでしかない。ケラケラ笑いながら、ジュダが肉棒を引き抜いていく。

じゅずっ！　ぶじゅじゅじゅじゅっ！

唾液と白濁液で肉茎は妖しく光り輝いて見えた。口腔を塞いでいたものが完全に抜き取られる。

刹那――。

「うげっ！　うぶぇぇぇっ！　うげっ！　げぼぉっ、げほっ、げほぉっ！」

セリーヌは何度も咳き込み、白濁液を吐き出した。ボタボタと濃厚な牡汁が床に広がる。唇から床に向かって伸びる粘糸が、あまりにも哀れだった。

（こんなモノが……本当に私の……私の口の中に……）

吐き出す白濁液に、改めて現実を思い知らされる。口の中にこの液体が入っていると考えるだけで、さらなる吐き気が湧き上がってきた。だから何度も咳き込み、ザーメンを吐き出す。が、それでも完全に出しきることはできない。液体というにはあまりに濃度があ

りすぎるザーメンは、歯の一本一本にまで絡みついていた。
「あっ！　ひどいな。せっかく流し込んであげたのに吐き出しちゃうなんて！」
咳き込む姿にジュダが不満そうな声をあげる。眉を吊り上げた姿は本当に怒っているようにも見えた。
「全部飲まなくちゃ駄目じゃないか！」
その姿は我が侭を言う子供そのものにしか見えない。それがまた不気味だった。
「だまっれ……はぁはぁ……誰がこんなものを……こ、こんなことですべての女が言う通りになると思うなよ……」
荒い息を吐きながら、女騎士は不気味な少年を睨む。どんな陵辱を受けようとも、心まで屈する気はない。
「……ふ～ん。まだそんな口が利けるんだ。どうもセリーヌは自分の立場ってものをわかってないみたいだね。はぁ……仕方ないな」
これに対して少年は額を押さえ、大袈裟に息を吐きながら首を左右に振った。
「もっと躾けないと駄目みたいだね」
語りながら少年が目でサラに指示を下す。
「うわっ！」
すると彼女の手によって、セリーヌの身体は無理矢理ベッドの上に仰向けに寝転がされてしまった。ツンと張りのある胸が、自重で左右に潰れてしまう。

「それだけ大きいおっぱいなら。十分これを挟むこともできるよね」
そこにジュダがのしかかってきた。小柄な少年とはいえ、下から見上げることになるとかなりの圧迫感を感じる。
「これ以上……何をする気だ……」
僅かに恐怖さえも憶えてしまう。
「だから……立場を知ってもらうんだよ」
先ほど射精したばかりだというのに、少年の肉棒はまったく衰えを見せず、未だに下腹部につきそうなほどに勃起している。そのペニスをセリーヌの胸元に擦りつけてきたかと思うと、両手で広がった乳房を押さえ、できた谷間に挟んできた。
「な、何だこれっ⁉」
(胸に汚いものを挟むな！　な、何のためにこのような……)
パイズリという行為が行われていることを女騎士は知らない。ただ、穢らわしいことだとは認識でき、思考が混乱する。その様子をジュダは嬉しそうに見詰めながら、グラインドを開始してきた。
「くっ……私の胸を好き勝手に……」
胸と胸の間で、赤黒い亀頭部が前後に揺れ始める。先ほどの唾液と精液が潤滑剤となっているのか、その動きはヌルヌルとスムーズなものだった。乳房が汁で濡れていくのを静観するしかない。動かぬ身が憎かった。

肉棒が動く度にぬちゃぬちゃと湿り気を帯びた音が、セリーヌの耳に届く。しかも、突き上がってきた巨棒は、サラによって顔を上げられた女騎士の口に届いた。そのまま肉先が再び口唇を押し開き、口腔内へと侵入してくる。

「んぶっ！　ぶふぅっ！」

再び口に広がる苦味。必死に唇を閉じて侵入を拒もうとするのだが、先ほどの口淫のせいで力が入らない。されるがままに蹂躙されるしかなかった。抵抗できない自分があまりにも情けない。

（また私の口をペニスで蹂躙する気か……。またアレを私の口に流し込むつもりか。なぜだ！　薬程度で……何と不甲斐ない！）

射精を思い出すだけで、屈辱に身体が震え出す。自分自身に対する怒りすら湧き上がってきた。

「大丈夫だ。安心してよ。今度は女の喜びも、教えてあげるからさ。サラ」

ジュダが無邪気に教育係に指示を下す。すると彼女は細い針のようなものを取り出す。プスッ、プスッと一回ずつセリーヌの乳房にその先端部を刺してきた。

「んっんっ！」

冷たい感触に、一瞬背中が反り上がる。

（何だ？　今のは何だ？　私に何をした!?）

肉棒を咥えさせられているため、言葉を出すことができない。だから視線で問いかける

と、ジュダは「すぐにわかるよ。ふふふ」と言って頬笑んだ。
実際変化はすぐに起きる。
「んんっ⁉」
（何っ！　何が起きた？　胸が急に苦しく。何だ？　何が起きてる？）
突然乳房が張り詰め始めた。胸の中から何か熱いものが湧き上がってくる。圧迫感のようなものを憶えた。
「うくっ！　くううっ！」
苦しみにも似た息がもれる。
「どう？　すごい効果でしょ。セリーヌのおっぱいに刺したのは、僕が開発させた新種の魔法薬なんだ。効果は簡単。妊娠してなくてもおっぱいから母乳が出るようになるんだよ。母乳を出すのって、女の悦びなんでしょ？」
語りながらズルリッと肉棒を動かす。
「んくひあっ！　ぐぅっ！」
再び肢体を、苦しみが襲う。僅かに動かれるだけで、乳房の圧迫感がさらに強まった。
「ほらすぐにでもおっぱい出そうだろ？」
「そ、そんなもの出ないっ！　ふざけたことを抜かすな！　んぐぅっ！」
じゅごっじゅごっじゅごっ！
否定しようとした途端、ジュダのピストンが速度を増す。途端に肉竿が乳房を擦り上げ

る。思わず女騎士はビクリッと身体を震わせた。伸びる指先がベッドシーツを掴む。
（胸が痺れる。乳首が震えてる。ペニスに擦られてる。こ、こんな馬鹿なっ！）
受け入れがたい感覚だった。だから女騎士は首を左右に振り、肉体をくねらせながらも、必死に湧き上がってくる射乳感を否定する。
「出したいんでしょ？　王子のペニスでおっぱい噴き出しそうになってるんでしょ？」
耳元でサラがささやく。
「で、出るかっ！　私は母乳など出さない。その馬鹿な口をさっさと閉じろ」
「強情だなぁ。これでも？　ほらほら」
ジュダの乳房を押さえる指が、乳頭に触れる。ほんの少しタッチするだけの動き。であったはずなのだが――。
「んくぅううう！」
僅かそれだけのことで、乳首だけではなく、乳房全体が燃えるように熱くなってしまう。
（何だ？　何だこれは？　どうしてだ？）
自分の身に起きている事態が信じられない。屈辱と混乱ばかりが広がっていく。
口腔に広がる苦味。そこに付随するように、乳房が張っていく感覚が身を包む。
（私の身体が？　このような……違う。これは私の身体のせいではない！　く、薬のせいだ！）
乳首から母乳が噴き出そうとしているのがわかる。自分の身体が自分のものではないよ

うな気さえした。少年の好きなように身体が変えさせられていることに、恐怖すら憶える。
「おっぱいの先っぽが震えてますよ。やっぱりミルクを出したいんじゃないですか？　素直になったほうが身のためですよ。フィオナ様だって素直になって、淫乱な本性を曝け出して、わたくしの前でイッたんです。貴女だって素直になったほうがいいですよ」
　再びサラが言葉を挟んでくる。彼女が持ち出したのはフィオナのことだった。
「き、貴様っ！　フィオナのことを、口にす――んあっ！　ぐうう！　フィオナは淫乱なんかじゃなっいっ！　あっあっ！　うごっくなっ！　もう動くなっ！」
　ジュダが腰を前後させる度に、セリーヌの息が詰まる。
（駄目だ！　苦しい。口が塞がって息ができない。胸も張ってる。これでは、出て、出てしまう！）
　ジュダだけではなくサラまで腕を伸ばし、敏感になった胸を揉みしだいてきた。乳房がさらに膨れ上がっていく。
「淫乱じゃないって。あの方はわたくしの手の中で悶えまくっていたんですよ。ほら、貴女だって胸を揉まれるだけで、母乳を出したくなってしまうんでしょ？」
　動く指がセリーヌの乳房に食い込む。
「む、ね……胸に触るな！　んっんっ！　く、くそっ、何かくる。だ、だめだ。たえき、れない。く、くそ、くそぉっ！」
　何か熱いものが胸奥から、乳頭に向かって湧き上がってくるのを感じた。今まで感じた

こともない感覚に、女騎士は戸惑う。
恐怖すら憶えているというのに、逃げることもできない。与えられ続ける刺激に翻弄され、悔しさが込み上げてくる。
「ああ、セリーヌのおっぱいで僕のちんこ気持ちいいよ。まただ、また射精そうだ」
じゅぶぐっじゅぶぐっじゅぶぐっ！
笑いながら少年はさらにピストン速度を上げ、乳房を摩擦し、口腔を塞ぐ。彼の亀頭部は、いつ射精してもおかしくないほどに膨張していた。ジュズッと胸に挟まれた肉棒が、咽奥まで届く。
「さあ行くよ」
どじゅっどじゅっどじゅっ！
「や、やっめっ！　むぼっ!!　んっんっんぼぉおお」
食道に届くのではないかと思うほどペニスが突き入れられ、苦しみに瞳を見開いた。肉茎の脈動が口唇に伝わってくる。熱い。熱くて臭い。彼の興奮が伝わってくる。
「射精るっ!!」
びゅっびゅっびゅっ――どびゅるるるるるるっ!!
「んもぉおおっ!!」
同時に肉竿はビクビクッと震え出し、再びの大量射精が始まった。熱液が口腔を満たしていく。

「おぼぶっ！　ぶぼっ！　んぼっんぶえぇえええっ！」
（射精てるっ！　また熱いのが、熱いザーメンが射精てるっ！　熱くて、苦くて、臭くて、い、嫌だぁあああああっ！）
セリーヌの思考も嫌悪に染まる。同時に乳房を包んでいた熱気がさらに激しさを増していき、そして――。
「ほら、出しなさい」
サラが妖艶に笑いながら、止めとばかりに乳房をギュッと搾り上げてきた。
「う、うあああっ！　だ、や――む、ね、胸が、むねがぁあああっ！」
びゅっ！　びゅぶっ！　びゅぶるるっ！
もはや矜持だけで耐えきれるような段階ではなかった。乳首の先端部から、大量の母乳が噴き上がる。まるで牡の射精のような勢いで、セリーヌはミルクを室内に飛ばしていた。
「こ、こんな……ぼにゅ、母乳を噴かされるなんて……こんなことが……」
自分が母乳を噴き出しているということが信じられない。薬によって自分の身体を変えられてしまったという現実が、重くのしかかってきた。
「どう？　すごいでしょ。クレオラの魔法薬の効果は。ふふ……それにしてもおっぱい出しすぎだよ。こんなに飛び散らせて、まったく。僕の部屋をこんなに汚して。それに、また僕のザーメンを吐き出して……」
彼の言葉通り、口腔に流し込まれた精液を、セリーヌは再び吐き出してしまっていた。

女にとって大事な部分を嬲られる悲しみに、エリスの唇からは騎士らしくない悲鳴がもれ、フィオナはもっとも信頼する騎士の名を叫んでしまう。

（フィオナ様の身体だけは、純潔だけは守らなくてはいけないのに……）

このメイズに入る前、秘密裏にあった女王から伝えられた言葉。「この世界を混沌に支配されないためにも、フィオナの身体だけは、処女だけは守ってください」という言葉が、頭の中に蘇る。

王国の人間にとって、純潔は将来の夫となる者以外に捧げてはならない。

そのことは、第三騎士団長に着任した時に聞かされていたが、今にも倒れそうなほど衰弱していた女王からの言葉は、それ以外の、騎士団長にも伝えられない秘密があるように感じられた。

「お、王女だけは……フィオナ様には手を……ふぅああっ！」

肢体を震わせながらもフィオナを助けようとしてみるが、布越しに淫部を嬲られる悦くすぐったさに、全身がピクピクと痙攣して何もできない。

どうにかしてこの陵辱器官から離れようと、触手に搾られる両胸を大きく揺さ振り、肢体をメチャクチャに動かして暴れてみるが、淫部に食い込んだ陵辱器官が離れることはなく、布越しに淫唇をかき分けた先端が処女孔を擦ってくる。

透けた布に浮き出した淫核やお尻には、さらなる触手が突きつけられ、肢体を嬲り穢すように剥き出した女芽や尻孔を先端で嬲ってきた。

「んはっ！　さわるな……そんなところ……あくぅっっっ！」
「あんっ、そこはダメ……そこだけは……ひゃんんっ！」
触手が淫部で動き、布越しに秘孔を嬲ってくる刺激に、上擦ったふたりの声が艶めかしく部屋に響く。
どんなに耐えようとしても、秘孔から膣内にまで伝わってくる女痒さに頭が白濁し、大量に溢れていく愛液が、魅惑的なお尻を濡らしながら床へと滴り落ちる。
「んぁ……こんな……わたしのアソコにこんなモノを……あうっ、あふぅうう……」
「さわらないで……わたくしの大事なところ……んんっ、もうさわらないでぇええっ！」
触手が動き、彼女たちの肢体を嬲る度に濡れた声が部屋に木霊（こだま）し、切っ先で擦られる秘孔からこらえきれない悦痒さが肉体を駆け巡ってくる。
完全に淫唇の形と粘膜の色を透かせたショーツは、同じ色の薄い草むらと淫核まで魔族に披露してしまい、王女と貴族の娘であるふたりを娼婦のように彩ってしまう。
ヂュリ、ヂュニュ……ヂュリヂュニュ……。
「「んぁっ、あふっ、はふぅううっ！」」
淫部で淫らな音を奏でられ、触手の先端で秘孔を擦られたフィオナとエルスの肢体が小刻みに震え、秘孔から溢れた愛液が床に淫らな水溜まりを作っていく。
力の入らなくなった槍騎士はその美貌を赤く染め、戦う気力を奪われたように紫の瞳を潤ませ、全身の肌をピクピクと震わせ続けている。

「も、申し訳ありませんフィオナ様……、こんな目に遭わせてしま……きゃうっ!?」
潤んだ瞳に王女を映し、守れなかったことを詫びた瞬間だった。
今まで触手に嬲られるふたりの淫姿を楽しんでいた悪魔が、いきなりエルスに襲いかかり、彼女に屈辱を与えるように黒い紐ショーツを引き下ろしていく。
「うぁああっ！　脱がすな……脱がすなこのケダモノぉおおっ！」
涙をこらえながら叫ぶも、黒いショーツが太腿まで下ろされてしまった。
情欲を漲らせた魔族の眼は、M字開脚のまま吊られている槍騎士の淫部を凝視し、今まで誰にも見せたことのない薄く開いた淫唇や、その奥でヒクつく処女孔まで視辱してくる。
（こんな魔物に……こんな魔物に見られてしまうなんて……）
消せない傷が心に刻み込まれる。
悲しみに身を震わせた槍騎士の肢体は、触手によって床へと下ろされ、放尿姿勢から悪魔にお尻を突き出す、立ちバックの体勢を取らされてしまった。
処女にもかかわらず、娼婦のように露わにされたお尻を悪魔に掲げたエルスの頬には、あまりの羞恥に瞳から零れた涙が伝っていく。
「や、やめて……」
声が震える。魔族にお尻を突き出した姿勢にされたのだ。この後何をされるのかは、想像したくもない。
「イヤぁああああっ！　許して……お願い……、これ以上の辱めはもう……」

フィオナの悲鳴に、エルスは濡れた瞳を彼女に向けた。
彼女も槍騎士と同じように、触手によって白いショーツを太腿まで引き下ろされ、大事な部分を完全に露出させられている。しかも、触手に嬲られ続ける王女の身体は、幼児の放尿姿勢から立ちバックの体勢に変えられ、スカートを触手で捲り押さえられたまま、槍騎士の前に下ろされてきたのだ。
同じ金色の髪を持ったフィオナの姿に、まるで鏡に映る自分の姿を見せられているような気分にさせられ、淫らなペニスの受け入れ姿勢に正常な理性が乱されていく。
「フィオナ様をわたしと同じ姿にして……何を……させる気ですの……あふっ!?」
自分と同じ体勢にされた王女と対面させられたエルスには、悪魔の考えがわからない。
だがその直後、彼女の背後から悪魔が襲いかかり、背中から太い腕を胸元へと伸ばして、触手の巻きついたふたつの美峰乳をムニュムニュと鷲掴みにしてきた。
「はくっ！　んぅ……ふぅくんんっ……」
ふたつの美峰乳を、大きな魔族の手と触手に搾り揉まれ、肉果実全体が心地いい圧迫悦と、太指が柔房に食い込む痛みに包まれ始めた。
だが、思っていたよりも屈辱を感じない。それどころか、悪魔の手に揉まれ触手に搾られる両胸が甘く痺れ、切ないほど疼いてしまう。
（わたし、どうしてしまったんですの……）
「んぁあぁぁあああああっ!?」

自分の肉体の反応が信じられず、熱い吐息を繰り返しながら肌を震わせたエルスに、新たな陵辱が加えられた。
興奮で子供の脚ほどの大きさにペニスを勃起させた魔族が、何の予兆もなしに彼女の太腿の間に牡槍を突き刺し、太幹で淫唇と秘孔を擦りながら腰を振ってきたのだ。
「わっ、わたしのアソコに何かが触れて……はく、擦れ……、いやぁあああっ！」
予期せぬ悪魔の欲情に、大きなお尻に引き締まった腹部を叩きつけられた槍騎士は、瞳を大きく見開いたまま淫唇と秘孔を魔の牡槍に灼かれてしまった。
鉄のように硬く熱い魔ペニスは、処女の悲鳴などおかまいなしに彼女の股間下でピストンし、淫唇をかき捲りながら愛液を溢れさす秘孔を擦ってくる。
「くはっ！　やっ、やめ……あうっ！　擦れ……わたくしのアソコがおかしく……」
知識のない素股をさせられ、初めて感じる性の刺激に頭の中が混濁（こんだく）していく。
縦カールの金髪を乱れさせながら、何度も頭を振って刺激を拒んでも、淫部から全身に伝わってくる女痒さに肉体が痺れ、唇から艶めかしい喘ぎを奏で続けてしまう。
「ひゃふぅうぅぅうぅっ！　あんっ！　あっ、いや……んふぁあああっ！」
自分ではない喘ぎが部屋に木霊した。
「んうっ……あうっ、フィオナ……様……」
こらえきれない喘ぎを繰り返して目の前にいる王女を見てみれば、触手で大きな美双乳を歪まされた彼女が、幼さが残る美貌を真っ赤にしながら、太腿に挟まされた触手を素股

させられている。
フィオナの股下で触手がピストンする度に、彼女の秘孔から溢れた愛液が魔の陵辱器官をベトベトに濡らして飛び散り、高貴な美脚を汚して足元へと流れていく。
（フィオナ様があのようなお顔で触手に……わたくしもきっと同じ顔で……）
悪魔と触手。肉体を陵辱する相手は違うが、まるで鏡で自分の淫姿を見せられているような錯覚に肉体が激しく疼き、興奮が際限なく高まってしまった。
「んぁああっ！　フィオナ様……んはっ、ひゃひっ、フィオナ様ぁあぁあっ！」
「んふぅううっ！　ひゃんっ、エルス……はふっ、エルスぅうぅうっ！」
もう同じ金色の髪を持った相手から目を離せない。ふたりは触手と悪魔に陵辱される互いの姿を見ながら、自然と相手の名前を呼び、その美しい肢体を半痙攣させ始めた。
「んふぁうっ！　身体がもう……わたし……は……はひっ！　んぁああっ！」
魔族の手が触手の絡まった美峰乳に指を食い込ませ、荒々しく揉んでくる度に胸全体が切なく痺れ、尖りきった乳芽が激しい悦痒みで包まれている。
大きなペニスが何度もピストンする淫部は、魔肉槍が一度動かされる度に淫唇がグニャグニャと歪み、強烈な痺れを生む秘孔が熱い肉幹に情熱的なキスを繰り返してしまう。
内股を愛液でビショビショにした両脚は、悪魔の陵辱でもう力が入らず、ガクガクと膝を震わせながら素股陵辱に耐え続ける。
「グゥオオッ！」

ヂュチャッ！　ヂュリュッ！　ヂュリュヂュチャッ！　ヂュリュリュッ！
「はひぃぃぃぃぃっ！」
「んぁあぁぁぁあっ！」
興奮した悪魔の叫びとともに、淫部を素股陵辱する魔ペニスが激しく律動し、エルスは大きな肉果実を激しく弾ませて嬌声を張り上げてしまった。
王女の淫部を擦っていた触手も同時に激しくなり、全身を引き攣らせ始めた彼女が、天井を向きながら同じように嬌声を張り上げている。
部屋にはふたりの濡れた喘ぎと淫らな水音が木霊しあい、彼女たちを抗えない絶頂へと駆け昇らせていく。
「んくっ！　あふっ！　な、なんですのこれ……あうっ、痺れ……ひゃふぅうっ！」
「ひゃんンっ！　わたくしまたっ……またこんな……あんっ！　イ……イク……」
淫部から伝わる悪魔の肉槍が脈動を早め、肉幹を一回り太くしながら膣内にまで牡の灼熱感を伝えてきた。
触手に素股陵辱されるフィオナも、自然とクレオラで教えられた言葉を口にし、為すがまま触手に肢体を嬲られている。
「んぁあぁっ！　なんですのこれ……あうっ、アソコがジンジンして……、くるっ！　あっ、あっ、なにかきちゃうぅうぅうぅっ！」
「わたくしまた……きゃんっ！　またこんな辱めで……、やっ、はふっ、んぁ、あっ、あ

っ、きゃうううううっ！」
エルスの肉体は、もう自分ではどうすることもできない女疼きと焦燥感で包み込まれ、悪魔の腹部に大きなお尻を何度も叩かれながら、秘孔を肉幹に擦られる被虐的な快楽から逃れられなくなってしまった。
鏡のように対面する王女も同じように快楽から逃れられず、肢体を何度も半痙攣させながら、触手の幹で激しく処女孔を擦られ続けている。
素股する悪魔のペニスと触手はその切っ先を膨らませ始め、ふたりの身体を白濁塗れにさせようと、触手はエルスの肉体へ、そして悪魔のペニスはフィオナの肢体へと、陵辱の狙いを定めた。
「はくっ！　あっ、くぁっ、ふぁああっ！　もっ、もうダメ……わたし……はふっ！」
「ひゃんんっ！　身体が痺れ……あうっ！　イク……わたくしイッ……あっ、んあっ！」
性の知識がほとんどない槍騎士には、もう何もわからない。
ただ肢体の奥から湧き上がってくる感覚に肉体を痺れさせ、顎を仰け反らせながら淫らに喘ぎ、口の端からだらしなく唾液を零すことしかできないでいる。
秘孔からは漏らしたように愛液が溢れ、槍騎士の真下の淫らな水溜まりを広げていく。
「きゃふぅううっ！　なっ、なにが起ころうとしているの……んあっ、はふっ、嫌っ、あんっ、嫌ですわぁあぁあぁあっ！」
「グゥオオオオオオオオオオッ！」

淫部に感じる魔根の脈動にエルスが畏怖を感じた瞬間。
突如悪魔が潰れるほど美峰乳に指を食い込ませ、凄まじい勢いで脈動する魔ペニスを素股に突き刺して、亀頭で淫核まで弾いてきた。
秘孔は壊れるほど肉幹で捲り返され、雷撃の直撃を受けたような痺れが淫部から全身に広がってくる。
「やっ、やめ……ひゃふぅうう　あうっ、やめっ⁉」
ドビュルルッ！　ビュルッ！　ビュルビュルビュルビュルッ！
「嫌ですわっ、あうっ！　んぁっ！　はふぅううっ！　許し……ふあっ、ンぁあぁアあぁあぁアあぁあぁアアあ――――――ッっ！」
「やだっ、んふっ！　辱めで……辱めでイッちゃう……あふっ、あっ、あっ、イクっ！　イクぅうぅぅうう――――――ッっ！」
プシャッ！　プシャアアアアァァァ……。
悪魔の射精とともに、激しく淫部を魔肉槍と触手で擦られたフィオナとエルスは、立ちバックの体位のまま背を弓なりに仰け反らせ、甲高い声を奏でながら絶頂に駆け昇らされてしまった。
ヒクヒクと蠢く秘孔からは濃い愛液が溢れ、小さな尿道は小指の先が入るほど広がり、初めての潮が噴き出していく。
「んぁああっ！　汚いのが……汚いのがわたしに、わたしにぃいイいィいいっっっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
偶数月
17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
奇数月
12日発売
フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!
コミックプリズム
不定期
発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
淫らに堕ちまくるヒロインがアンソロジー!
奇数月
中旬発売
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!